2023 年度 S セメスター　　2023 年 4 月 7 日

Updated 2023 年 4 月 25 日

「社会制度変動論 I」（大学院総合文化研究科）
「特殊講義 政治思想史学の先端 I」（教養学部後期課程）

馬路智仁
大学院総合文化研究科国際社会科学専攻
tbaji@waka.c.u-tokyo.ac.jp

グローバル思想史（global intellectual history）の挑戦：その課題と限界（シーズン２）

曜限：毎週金曜日、3 限目（13:15~14:45）
＊毎回若干の延長の可能性がある（4 限目に差し支えない範囲で）

開催場所：初回のガイダンスは、11 号館 1109 教室
2 回目以降は、2 号館 303 教室

＊初回のガイダンスを含めて原則対面で行う。

＜概要＞

歴史学分野におけるグローバル・ヒストリーの台頭と軌を一にして、思想史学の分野においてもここ十数年グローバル思想史（global intellectual history）という試みが胎動している。この新たな（あるいは新たな装いを纏った）試みでは、どのようなアプローチが提起されているのだろうか。またそれによって政治思想史の叙述方法は、どのような転機を迎えているのだろうか。

本授業（演習）は、グローバル思想史を作り出そうとする、さらにこの潮流に対して疑問を投げかける著作・論文の検討を通じて、グローバル思想史を称賛すること無く、これによって既存の政治思想史の何が挑戦に晒されており、またこの新潮流自体の課題や限界がどこにあるのかを見定めようと意図する。**これを目的に、Ｓセメスターでは、グローバル思想史に関する最新の論文を綿密に読み、ディスカッションを通してその理解を深める。**

演習の主宰者（私）は、19 世紀末から 20 世紀前半のイギリス政治思想史を専門とする者である。しかし、同時期のアメリカや日本における類似の思想や、3 か国にまたがる知的交流・共鳴関係をどのように動態的に描き出すことができるのかについて模索している。そうした観点からグローバル思想史に接近したいと考えている。

演習の参加者は、同じ問題意識を共有する必要はない。主宰者が最も望むのは、演習およびそこにおける実践を通じて、参加者が政治思想史の方法論や思想史を書く意味や目的について、より深く思考し、より自覚的になることである。なお副題の一部に「シーズン 2」と記したのは、2019 年度 S セメスターに類似の趣旨の授業を開講しており、今回が 2 度目となるからである。無論、同授業の履修を前提とすることは無い。

＜S セメスターの課題文献＞

「授業計画」欄に記す。課題文献のコピーはメーリングリスト（＊本シラバス末尾参照）を通して送ります。

＜授業方法＞

毎回の課題文献に対して報告者と討論者を割り当てる。報告者は文献の著者になり替わったつもりで、その議論の要点を記した**レジュメ（A４・2 枚）**を作成すること。またレジュメの冒頭に、その議論の核心的な主張を bullet point 3 点にまとめること。討論者は、文献の要点に関して、自らの見解を **A4・1 枚に整理したディスカッション・メモ**（論文の位置づけや意義の提示、解釈に困った点の提示などを含む）を作成すること。

報告者と討論者の間で課題文献の内容について事前に意見を交わすのは構わないが、報告内容と論点提示を事前に「すり合わせる」のは禁じる。

文献の報告時間は **15 分以内**（参加者皆が文献を事前に読んでくることを前提としているため）。討論者による論点提示は **5 分程度**。

報告レジュメ、ディスカッション・メモともに、**当日の朝 9:00 までに**、メーリングリストへ投稿すること。他の参加者や私が事前に目を通したり、（ハードコピーを手元に置きたい者が）印刷する時間を踏まえての設定です。

S セメスター終盤に行う予定の研究発表については、上記の限りではない。この場合発表者が、**他の参加者が自らのフィールドに精通していないことを前提に**、詳し目のレジュメ（ないしそれに相当する発表資料）を作成すること。それを、**前日の夕方 17:00 までに**、メーリングリストに投稿すること。他の参加者は、授業開始までにそれに目を通してくること。

★研究発表（主に大学院生）：文献講読などを通して学んだアプローチが、自らのフィールドにどのように適用・応用可能であるか（または可能でないか）について考察し、報告する。

＜成績評価方法＞

平常点（報告・討論内容の質、全体のディスカッションへの貢献度）：60%

期末エッセイ（小論文）：40%

期末エッセイは、大学院生であれば上記研究発表に基づいて執筆。学部学生の場合、本シラバス末尾を参照。いずれも日本語であれば 4000 字以上、英語であれば 2000 words 以上（上限は冗長にならない範囲で特に設けない）。締切りは **8 月 4 日（金）**。

提出方法：次の二つの私のメールアドレスへ添付して送ること。

tbaji@waka.c.u-tokyo.ac.jp; tomobaji@gmail.com

＜授業計画＞

＊課題文献の設定は、上記研究発表者の人数に依拠するところが大きいため、6/23 以降の予定は後日確定します。

日付	課題文献	報告者	討論者
4/7	ガイダンス、自己紹介、報告割当て	N/A	N/A
4/14	Christopher L. Hill, “Conceptual Universalization in Transnational Nineteenth Century,” in Samuel Moyn and Andrew Sartori eds., *Global Intellectual History* (Columbia UP, 2013), pp. 134-58. Cf Moyn and Sartori, “Approaches to Global Intellectual History,” in *Global Intellectual History.*	金さん	呉さん
4/21	Duncan Bell, “Making and Taking Worlds,” in Moyn and Sartori eds., *Global Intellectual History* (Columbia UP, 2013), pp. 254-79.	南藤さん	鈴木侑人さん
4/28	Dag Herbjørnsrud, “Beyond decolonizing: global intellectual history and reconstruction of a comparative method,” *Global Intellectual History* 6, no. 5 (2021), pp. 614-40.	オルタさん	金さん
5/19	①Christian Olaf Christiansen, Mélanie Lindbjerg Guichon and Sofía Mercader, “Towards a Global Intellectual History of an Unequal World,” *Global Intellectual History*, online first view (2022), pp. 1-13. ②Christian Olaf Christiansen and Mélanie Lindbjerg Guichon, “The Janus-Face of *Interdependence*: A Transnational Intellectual History of Global Inequality in the US and Ghana, c. 1975–1985, *Global Intellectual History*, online first view (2022), pp. 1-24.	呉さん 鈴木日有桜さん	南藤さん リさん
5/26	休講（David Armitage らを迎えての 5/24 の国際セミナーと、週末の政治思想学会のため）。		
5/29	Martin J Bayly, “Global intellectual history in International Relations: Hierarchy, empire, and the case of late colonial Indian international thought,” *Review of International Studies*, online first view (2022), pp. 1-29.	金子さん	オルタさん
6/9	①Leigh K. Jenco and Johathan Chappell, “Introduction: History from between and the global circulations of the past in Asia and Europe, 1600-1950,” *The Historical Journal* 64, no. 1 (2021), pp. 1-16. ②Martin Dusinberre, “J.R. Seeley and Japan’s Pacific Expansion.” *The Historical Journal* 64, no. 1 (2021), pp. 70-97.	リさん	鈴木日有桜さん
6/16	Pablo Ariel Blitstei, “A Global History of the “Multiple Renaissances,” *The Historical Journal* 64, no. 1 (2021), pp. 162-84.	鈴木侑人さん	沖田さん
6/23	Martin Mulsow, “A reference theory of globalized ideas,” Global Intellectual History 2, no. 1(2017), pp. 67-87.	沖田さん	金子さん
6/30		南藤さん	

7/7		呉さん	
7/14		金さん	

✔ 最後に各々自己紹介（所属、学年、問題関心など）。

メーリングリストについて

課題文献のコピーや、レジュメ、ディスカッション・メモを共有するためのメーリングリストを作成しますので、履修希望者は今日のガイダンス終了後から（shopping week が終わる）**4/11（火）の夜までに**、私（tbaji@waka.c.u-tokyo.ac.jp）までメールアドレスを教えて下さい。

期末エッセイについて（学部学生）

セメスター中に一次文献（論文・論説）のリストを提示する。その文献を精読し、授業などで学んだアプローチを用いて、**自由に**分析してください。提示する一次文献は主に、分析し易いよう（二次文献も比較的存在するような）近代日本の政治思想から選ぶ予定であるが、希望があればリスト外の文献を対象に執筆しても良い（特にある程度のフィールドが固まりつつある卒論執筆者）。

【例】

- 中江兆民（原著 1887 年）『三酔人経綸問答』（岩波書店、1965 年）
- 長谷川如是閑（萬次郎）「ヘーゲル派の自由説と国家――哲学的国家観に対するホブハウス教授の批判を紹介す」・「絶対国家説に対する社会学的批判――ホブハウス教授の絶対国家説の批判」『我等』第二巻第一号・二号（1920 年 1 月・2 月）
- 矢内原忠雄（原著 1925 年）「アダム・スミスの植民地論」『矢内原忠雄全集 第一巻』（岩波書店、1963 年）

＊5 月 24 日（水）国際セミナー（参加任意・推奨）

Floating in the Pacific: A "Wave-Maker" in Oceanic History

GSI International Seminar

"Oceanic Japan: The Archipelago in Pacific and Global History"
by Nadin Heé (Osaka University)

"Three Views of Oceanic Japan"
by David Armitage (Harvard University)

Discussants:
Greg Dvorak (Waseda University)
Shin Takahashi (Victoria University of Wellington, via Zoom)

Chair:
Tomohito Baji (The University of Tokyo)

Date & Time: 24 May 2023, 15.00 - 17.45 (JST)
Format: Hybrid (in person & Zoom)
Language: English (no translation)
Venue: Collaboration Room 3, Bldg. 18,
The University of Tokyo, Komaba 1 Campus

REGISTRATION REQUIRED:
https://forms.gle/dorPfmMaUjx3dyXUA
Deadline: 22 May 2023

Sponsored by Nomura Foundation
野村財団社会科学助成「『大洋の政治思想史』の創造に向けた国際共同研究」（代表：馬路智仁）

Global Studies Initiative
The University of Tokyo

Organized by the Institute for Advanced Global Studies, UTokyo